HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	文禄五年（1596）閏七月豊後・伊予地震による伊予国板島城（現宇和島城）の被害 ： 藤堂虎高の遺帖
Author(s)	中西, 一郎
Citation	北海道大学地球物理学研究報告, 72, 383-386
Issue Date	2009-03-15
DOI	https://doi.org/10.14943/gbhu.72.383
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38168
Type	departmental bulletin paper
File Information	28_Nakanishi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北海道大学地球物理学研究報告
Geophysical Bulletin of Hokkaido University, Sapporo, Japan.
No.72, March 2009, pp.383-386

文禄五年（1596）閏七月豊後・伊予地震による伊予国板島城（現宇和島城）の被害
－ 藤堂虎高の遺帖 －

中西　一郎
京都大学理学部地球物理学教室

(2009 年 1 月 16 日受理)

Damage of the Castle Itajima (Present Castle Uwajima) caused by the 1596 Bungo-Iyo Earthquake in the Iyo Province of Shikoku Island in Southwestern Japan
－ Missing Record Written by Toudou Torataka －

Ichiro NAKANISHI
Department of Geophysics, Kyoto University, Kyoto 606-8502

(Received January 16, 2009)

A record is found in the historical document of the Toudou family in relation to the 1596 Bungo-Iyo earthquake. The document was written about 180 years after the occurrence of the earthquake. The record shows that the castle Uwajima was damaged by the 1596 earthquake and provides us with an important constraint on the location of the earthquake.

Ⅰ．はじめに

文禄・慶長期に発生した地震の記録を収集するために藤堂(とうどう)藩の初期史料を調べている．藩祖藤堂高虎は文禄四年（1595）七月，秀吉から伊予国宇和郡に七万石を与えられ，父虎高（白雲）を伴って板島(いたじま)（丸串(まるぐし)）城に入った．

藤堂藩最高の編纂書と称される藤堂高文編「宗国史」に「慶長元丙申年八月修板嶋城」との短い記述がある．中西（2002）は文禄五年（慶長元年）地震に関する伊予での被害を示す史料を整理したが，宇和島の記録は発見されていない．文禄五年地震の想定震源域（別府湾）（宇佐美，2003）は宇和島に近い．板島城修理の理由として地震による被害を予想した．

II．「公室年譜略」

喜田村矩常によって安永三年（1774）に編著された．明治 20 年（1887）に全 31 巻の書写が終えられ，東京大学史料編纂所に所蔵されている（岩波書店，1990）．原書（旧伯爵藤堂高潔蔵本）は大正 12 年（1923）に発生した関東大震災によって灰燼に帰した．山本武夫氏と大長昭雄氏が慶長十九年の地震に関する議論（萩原，1982）でこの史料を採用したが，あまり知られていない．

東京大学史料編纂所本（写本）を底本として上野市古文献刊行会によって 2002 年に刊行された．本論ではこの刊行本を用いる．

III．文禄五年閏七月の地震による宇和島城の被害

「公室年譜略」巻第五（文禄元年～慶長三年）に次のような記述がある（Table 1 の 1 番）．「(慶長元丙申年）閏七月小　〇十二日　五畿内并ニ近国大地震ナリ四国辺モ最モ強シ板嶋ノ城営破損アリ則チ此月ヨリ城構ノ修補ヲ加ヘ玉フ（1 字下げ）私ニ曰此修造ノ事旧譜ニ失ストイヘトモ　白雲君ノ遺帖ニ依テ爰ニ挙ル」．板島城は現在の宇和島城郭に含まれる（兵頭，1956）．

高虎は板島城を改築し，城下を作った．現在の宇和島城は，高虎が伊勢国津へ移封した後，慶長十九年（1614）に入封した伊達秀宗によるものである．さらに寛文二年（1662）から同十一年まで 10 年にわたって伊達宗利による城郭大改修が行われた（兵頭，1956）．文禄五年地震時の板島城の城郭様式・規模は不明である．

喜田村矩常は，藤堂高虎が伊予板島 7 万石に封ぜられた文禄四年五月条に，注として板島の城邑の様子を比較的詳しく記述している．しかし，内容から判断して，編者の記述している板島城と城下は文禄四年当時のものではなく，「公室年譜略」が編纂された 18 世紀後半のものと考えられる（宇和島市，1962）．

「宗国史」にある「慶長元丙申年八月修板嶋城」という短い記述の意味するところはこれまで

Table 1. Earthquakes found in Kousitsu-Nenpuryaku

番	巻	地震発生年月日（和暦）	西暦	頁　段
1	第五	文禄五年閏七月九日	1596	120 上
2	第八	文禄五年閏七月十二日	1596	198 下
3	第十	慶長十九年十月廿五日	1614	251 下
4	第廿	寛永十年正月六日	1633	525 上
5	第廿三上	慶安二年六月廿日	1649	617 上
6	第廿三上	慶安二年六月廿日	1649	617 下
7	第廿八	寛文二年五月朔日	1662	831 上
8	第廿九	寛文五年十二月廿七日	1666	882 上

1）巻：東京大学史料編纂所本「公室年譜略」の巻．
2）頁段：上野市古文献刊行会本「公室年譜略」の頁と段．

謎であった．「公室年譜略」の記述からこれは同年閏七月に発生した豊後・伊予地震による板島城破損の修理であった．

地震による板島城の被害は閏七月十二日条に記されている．豊後・伊予に被害を与えた地震は閏七月九日に発生した（宇佐美，2003；中西，2002；中西・矢野，2003）．日付の違いは編者が伊予での被害を近畿の文禄五年地震によるとしたことに起因すると考える．

「公室年譜略」には 16 世紀末期～17 世紀中期に発生した地震の簡単な記述がある（Table 1）が，本論では 1 番の文禄五年閏七月九日の地震のみを扱う．

Ⅳ．文禄五年豊後・伊予地震の震源位置

これまでに伊予で収集された史料は東予西部と中予に限られていた（中西，2002）が，今回の調査によって被害地域は南予中部まで拡がった．被害規模は，史料の記述が正しいと仮定すると，東予西部での被害と同程度かやや小さいように思われる．宇和島は，九島（くしま）と坂下津（さかしづ）の半島が堤防となり，過去の南海地震では震害に比べ津波被害は小さい (宇和島市, 1962；宇佐美, 2003)．

石橋（1989）は，文禄五年近畿地震に伴った徳島県鳴門地域の中央構造線の活動を提案したが，中央構造線の活動を示す確実な史料は発見されていない．別府湾・伊予灘において海底活断層調査も行われたが，文禄五年地震に対応する可能性のある断層変位は認められていない (中田, 1995)．四国伊予地域においても中央構造線の活動に起因すると考えられる地震の史料は発見されていない．文禄五年地震による板島城の被害も中央構造線の活動に起因した地震によるとは限定できない．

過去 400 年間に伊予に屢々被害を齎した地震に芸予地震がある．羽鳥（1989）は瀬戸内海西部の安芸灘において平均して 50 年の間隔で被害地震が発生しており，マグニチュード 7.0～7.2 程度の地震が発生する可能性が高いことを指摘した．実際 2001 年 3 月 24 日に安芸灘でマグニチュード 6.7（気象庁）の地震が発生した．慶安二年（1649）から平成十三年（2001）までの 8 地震の発生間隔は 37～79 年であり，平均すると 50 年±13 年の間隔で発生してきたことになる．しかし，羽鳥（1989）が用いた 7 地震のうち享保十八年（1733）と文化九年（1812）地震の震央を安芸灘におくには無理がある．仮に震度分布の中心を震央にすると，この 2 地震の震央はそれぞれ岡山県南部と瀬戸内海中部になる．また豊後国が大きな被害を受けた地震は過去 400 年間に安芸灘～瀬戸内海中部では発生していない．

南海地震（1707，1854，1946）以外で豊後・伊予両国に大きな被害を与えた地震は，豊予（ほうよ）海峡（速吸（はやすい）瀬戸）で嘉永七年十一月七日（1854.12.26）に発生した安政南海地震の余震（マグニチュード 7.3～7.5）（宇佐美，2003）のみである．この地震による中予・東予での被害は大きくはなかったが，震源位置，規模，断層パラメータによっては，文禄五年豊後・伊予地震をシミュレートできるかもしれない．今後の課題である．

V．ま と め

文禄五年豊後・伊予地震に関する新史料を見出した．1 次史料ではなく，地震発生から約 180 年後に書かれた編纂史料ではあるが，この地震に関しては，4 年振りの新地震史料になる．藩祖が戦国時代を生き抜き，文禄・慶長期以後も絶えることなく幕末まで続いた大名家の初期史料を調べることにより，文禄・慶長期の地震史料を発見できる可能性があることを，津藩藤堂家の初期史料によって示した．

謝辞　小山順二教授から本記念号への投稿の機会を頂きました．山本茂貴氏から藤堂家文書についてお教え頂きました．門田恭一郎氏，宇和島市立中央図書館，愛媛県立図書館から関連資料をお送り頂きました．石野弥栄氏から板島城を含め宇和島の古城についてお教え頂きました．本稿の作成において 2006 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「歴史地震の詳細震度分布図の作成と断層パラメータの推定に関する研究」(研究代表者：都司嘉宣）を用いました．皆様方に感謝いたします．

文　　献

萩原尊禮（編著），1982．古地震　－歴史資料と活断層からさぐる，初版，東京大学出版会，312pp.
羽鳥徳太郎，1989．安芸灘における歴史地震の規模と津波の可能性，歴史地震，**5**，99-109.
兵頭賢一，1956．宇和島城沿革（再刊），宇和島市立図書館，30pp.
石橋克彦，1989．1596 年慶長近畿大地震で中央構造線が活動した可能性と 1605 年南海トラフ津波地震への影響，地震学会講演予稿集，1989 年春季大会，62.
岩波書店，1990．補訂版　国書総目録　第 3 巻，岩波書店，883pp.
中西一郎，2002．文禄五年閏七月九日（1596 年 9 月 1 日）の地震による伊予での被害を示す史料，地震Ⅱ，55，311-316.
中西一郎・矢野信，2003．中世地震史料の収集について（1）：大般若経奥書・棟札，地震Ⅱ，**56**，95-97.
中田高，1995．海底活断層の古地震学的研究，太田陽子・島崎邦彦（編），古地震を探る，古今書院，168-192.
上野市古文献刊行会，2002．公室年譜略－藤堂藩初期史料，清文堂出版，996pp.
宇佐美龍夫，2003．最新版　日本被害地震総覧 [416]-2001，東京大学出版会，605pp.
宇和島市，1962．重要文化財宇和島城天守修理工事報告書，宇和島市，46pp.